

國學院大學學術情報リポジトリ

秀吉期における新しい茶会様式：
吸茶の導入とその意義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹本, 千鶴, Takemoto, Chizu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000680

秀吉期における新しい茶会様式

— 吸茶の導入とその意義 —

竹本千鶴

はじめに

コロナ禍の二〇二〇年五月二十六日、裏千家家元坐忘斎は濃茶の各服点てを復活させ、流派を問わず参考にしてほしいと裏千家のホームページに動画を公開された。続いて同年十一月二十八日、新聞各社が報じたところによれば、奈良西大寺でも伝統行事の大茶盛が銘々に振る舞うスタイルに変更された。

茶道における濃茶の回し飲みは「一座建立」を象徴する所作であり、また大茶盛も真言律宗の本質「一味和合」の精神を反

映する行事として大切にされてきた。だが、新型コロナの蔓延により、濃厚接触以外の何ものでもない濃茶の回し飲みを避けるべく、家元の茶道も伝統行事も変革を余儀なくされている。

抹茶が伝来しておよそ九〇〇年。茶の湯はその姿を微妙に変えながら日本文化のひとつとして根づいている。その歴史を学ぶ者にとって、伝統文化の火を絶やさないようにと願う家元のメッセージは非常に重く、改めて回し飲みという行為を考えるきっかけとなった。

そもそも、裏千家が復活させた各服点ては、現家元の曾祖父すなわち十三代圓能斎鉄中（一八七二―一九二四）によって考

案された。その背景にはスペイン風邪や疫病の流行により、衛生面を考慮する当時の風潮があったという。しかしながら、歴史をひもとけば、濃茶を一人に一服ずつ供するスタイルそのものは圓能斎が初めて行ったわけではなかった。千利休によってわび茶が大成される以前、すなわち織田信長の頃まで、各服点てが当たり前であったのだ。それがいつ回し飲み変わったのか。またその背景には何があったのか。それらを解き明かすことが本稿の目的である。

第一章 問題の所在

一 先行研究の到達点

千利休によるわび茶の完成は、高弟山上宗二の記述などを根拠に、天正十年（一五八二）頃と考えられている^①。とすれば、回し飲みの出現はそれ以降ということになり、筒井絃一氏は『松屋会記』天正十四年十月十三日条をその初見と指摘する^②。そこには「御茶極無、スイ茶ハ宗治、久政、宗立、源五也、」とあり、極無で練られた濃茶を四名で吸茶、つまり回し飲みをしたと記されている^③。

さらに筒井氏は吸茶の出現について、尾張藩士近松茂矩

（一六九五～一七七八）による『茶湯古事談』（享保十六年（一七三一）序）の記述をあげる。それには、

一、昔ハ濃茶ヲ一人一服ツ、ニタテシテ其間余リ久サシク

主客共ニ退屈成リトテ、利休^{〔千〕}カ吸茶ニ仕初メシトゾ、と書かれている。すなわち、昔は濃茶を一人一服ずつ供していたのだが、あまりに時間がかり、亭主、客人ともに退屈なので利休が吸茶を実践し始めたというのだ。極めて率直な意見であるし、わかりやすい解説ではあるが、「スイ茶」の初見から一四五年後に書かれた史料によつて、その説明とするのは些か問題があろう。しかも、後に述べるように、この話には続きもある。

また熊倉功夫氏は、日本人の持つ「一味同心」「同じ釜の飯を食う」という根本的な考え方には人間同士を親しくさせ、縁を結ばせる面があるとし、そのことを吸茶と絡めて説明される^④。こうした概説は、吸茶がいかに茶道の理念に適した行為であるとの理解を促すばかりでなく、利休が関与しているのもむべなるかなと思わせるものがある。さらに言えば、このような連想は、歴史の事実を見失う恐れのあるいわば落とし穴ではなからうか。つまり、茶道史上の改革や手柄のすべてを利休と関連づけている後世の記録に対しては、細心の注意を払う必要

があるということだ。にもかかわらず、近年、利休時代の吸茶を考察した小林絃子氏は、筒井氏の説明を敷衍した上で、関連史料を博捜することなく、吸茶がキリスト教のミサにおけるワインの回し飲みから着想を得たことをにおわせ、「破天荒ともいふべき発想」と結論づけている⁽⁵⁾。つまり現在の茶道史研究では、筒井氏の説明が一般化し、『茶湯古事談』の解説が半ば常識となっているのである。

ところで、熊倉氏はここ五十年ほどの茶道史研究を総括され、研究史の理解と批判が不十分であるとの苦言を呈しておられる⁽⁶⁾。吸茶の問題は、まさしくそれに当てはまる事案ではなからうか。改めて、筒井氏が提示した史料も含めて検討する必要がある。

二 江戸時代の茶書に見える吸茶

まず、吸茶に関する史料として、『茶湯古事談』より一〇〇年ほど早く成立した茶書『草人木』を紹介したい。ここでは抹茶の分量を説明しながら、「むかしハ独ニ一服つつの故、ミすくい也、利休（リウ）よりハすい茶になる故に猶定なし」と吸茶にも言及している。つまり「昔は一人一服の濃茶を供していたため、一人分の抹茶は茶杓に三すくいであつた。利休から濃茶は吸茶

となつたので、分量の決まりはなくなつた」というのである。この記述は、すでに江戸初期から、吸茶は利休によって始められたもの、と認識されていたことを示している。『茶湯古事談』の著者近松茂矩もその説を採用したわけだが、さらに発生理由にまで踏み込んでいる。すなわち、各服点では長丁場になり退屈してしまうから、利休が吸茶を始めたというのだ。この『茶湯古事談』には、先述のように、筒井氏が紹介しなかつた逸話が記されている。あらましを紹介しよう。

ある時、利休の弟子である東陽坊長盛（一五一五〜九八）のもとに、豊臣秀次の家臣がやって来た。正式な手順で茶を出すべきだが、それではかえって多忙な客人に失礼と考えた東陽坊は、大量の薄茶を一碗に点てて吸茶でどうぞと供した。この話を耳にした利休は、東陽坊の機転を素晴らしい作意と褒めた。

この逸話のポイントは、当時の人々が本来の手順では茶会に時間がかかりすぎると思ひ始めていたという部分にあらう。そして、吸茶はそのジレンマを解決し、あの利休が作意とまで言つて弟子を褒めそやしたのだから、わび茶を効率よく行う最適な方法だと広く認識されていた、ということにならうか。

しかしながら、歴史学の立場からすれば、吸茶に対する先行研究の理解は非常に危ういと言わざるを得ない。それは後世の

史料を援用しているからではなく、後世の史料によって事実の認識をしているからだ。茶の湯に限らず文化史では、伝承や咄、逸話といった類いも大切にしなければならない。だが言うまでもなく、それらの扱い方には注意を要する。つまり吸茶の問題で言えば、天正年間後半に発生した事象を一五〇年ほど後の享保年間に書かれた史料を根拠にして説明を終え、それが再検討されることなく一般化していることが問題なのである。利休によって吸茶が始められたのだとすれば、当然ながら同時代史料にもとづいて議論がなされなければならない。すなわち、利休の時代＝秀吉の時代の史料ということだ。秀吉茶会での吸茶であれば、例えば天正十五年正月三日に行われた大坂城での大茶会などがよく知られている(『宗湛日記』)。こうした史料を吸茶解明の視点で読み直す必要がある。

第二章 吸茶の発生とその方法

一 「大名茶の湯」と各服点て

ここではまず、当該期における茶会のありようを簡単にまとめ、吸茶が導入される以前の飲み方を確認しておきたい。『山上宗二記』で明言されているように、当時は二つの茶の湯の系

統があった。ひとつが唐物を絶対視する「大名茶の湯」で、いまひとつが茶人のめざす「わび茶」だ。「大名茶の湯」は室町以来の伝統にもとづくスタイルで、貴人との距離をとるため六畳敷で行われた。それに対し「わび茶」は、唐物のみならず、和物や高麗物をミックスして狭い座敷の中で取り合わせる、いわば斬新なスタイルであった。そのことをジョアン・ロドリゲスは東山殿の古い様式を部分的に改めた様式と、「市中の山居」を取り入れ、東山殿の古い流儀を捨てたスタイルと明快に説明をしている(『日本教会史』)。前者が「大名茶の湯」で、後者が「わび茶」であろう。

「大名茶の湯」の意義や本質、それを実践した織田信長については種々述べたことがあるが、信長の茶会では家元の茶道として伝わっている「わび茶」からは想像もできないような作法や心得が必要とされたこともわかっている。そのありようは戦国時代の茶書『烏鼠集』などに書かれており、室町時代の武家故実に共通する理念や精神が多多見られることも指摘されている。例えば、「大名茶の湯」の原則であった各服点ては、別室で点てられた茶を将軍の御座所まで運ぶ者と、それを御前に差し出す者とが明確に区別されていた室町殿中のしきたりの名残と捉えられよう。また、各服点てにより客人の好みによって茶

の濃さを加減することができ、それこそが最も丁寧な振る舞いと認識されていたのである。従って、信長の茶会では各服点てに対応できるだけの少人数制がとられ、十五名の堺衆を招待した天正三年十月二十八日の妙覚寺茶会では、五名ずつ三組に分けて順次席入りするといった工夫がなされた^①。

しかし、たとえ少人数制であっても、各服点てが長丁場に及んだことは想像に難くない。というのも、当時の茶会では濃茶の後に白湯を二杯（正客が貴人の場合は一杯）、それから薄茶と続くのが決まりとされていたからだ。それこそが一期一会の醍醐味と考えられていたのであるが、やがて効率よく茶会を進行させる手立てが編み出されていく。それが、東陽坊の逸話に登場した一服を数名で飲み回す吸茶というわけだ。

二 史料でたどる吸茶のあゆみ

改めて、吸茶の初見とされる『松屋会記』天正十四年十月十三日条の中坊源吾の会を見よう。この日の客人は宗治、宗立、久政の三名であったが、「スイ茶ハ宗治、久政、宗立、源吾殿也、」と記されており、客人のみならず亭主をも含めた四名で回し飲みされた。現在の茶道に照らせば、回し飲みは客人同士で行われるのが一般的だが、天正十四年を境に一気に吸茶に移行した

わけではなく、主客同服や客のみ同服などさまざまなパターンがあったことがわかつている^②。しかも、堺の豪商津田宗及が「二名を一服にするとはあんまりだ」と発言していることから（神屋宗湛『見聞記』天正十四年十二月十九日条）、吸茶は合理的かもしれないが、各服点ての方がより丁寧で茶会にふさわしいと考える向きもあったようだ。つまり、吸茶が出現した時分にはルールはおろか、その位置づけすら定まっていなかったということであろう。

では、いつ頃、吸茶は定着したのだろうか。井戸茶碗の逸話の変遷をもとに考えてみよう。あくまで噂だが、『多聞院日記』天正十六年二月九日条に、

キト茶ワンヲ吸茶呑トテ五人シテ引アイ打ワリ無興ノ時、
細川兵部大夫歌ニ、ツ、キツ、五ツ、ニワレシ キト茶
ワン トカラハタレカ ヲイニケラシナト被説了、此比
（豊田秀吉）
関白殿ハキカイニスカレタリ、

という話が見える。すなわち、秀吉所有の井戸茶碗に練られた濃茶を五名で吸茶せよと出されたおり、客人たちは我先に飲むと茶碗を奪い合ったあげく、なんと茶碗を割ってしまったというのだ。凍りつく客人を前に、細川幽斎が『伊勢物語』にちなんだ和歌を即興で詠み、秀吉も感心したという。この手の話

には往々にして尾鰭がつくものなので、どこまでが真実かわからない。しかも噂のポイントは、明らかに幽斎の機転を利かせた和歌にある。だが、この話が流布されていたことは事実であり、ここから吸茶という新しいスタイルに対する戸惑い、混乱、無作法、不慣れといったイメージがあつたことが読みとれよう。

この逸話は長く茶人の間で伝えられたようで、多聞院英俊が書き留めてからおおよそ五十年後、奈良春日大社の久保利世の耳に入つた時には、吸茶云々の部分は消え、たんに秀吉の目の前で井戸茶碗が割れたことになっており、即座に幽斎が和歌を詠み、その場を収めたことが強調されている(『長閑堂記』)。その後、この逸話は吸茶の記載がないまま伝えられていったようだ(『茶話真向翁』『茶湯古事談』)。

このように吸茶云々の部分がそぎ落とされて、五十年ほどの間に逸話そのものが微妙に変化したのはなぜだろうか。その理由を示唆する史料がある。『長閑堂記』とはほぼ同時期にまとめられた『日本教会史』だ。そこでは吸茶の具体的な方法として、「客人は誰から飲み始めるか、たがいにかかり合つて、最初に主賓から始め、それを三口飲んでから第二の人に渡す。こうして皆が飲み終えるまで、つぎつぎに渡っていく」と解説されている。こうした手順に従つて、行儀よく吸茶が行われていたの

だとすれば、『多聞院日記』に書き留められたような騒動は『長閑堂記』の時代には起こりようもなからう。その点こそ、『長閑堂記』で吸茶云々の記述がそぎ落とされた理由ではなかったか。つまり、江戸時代の初めには、吸茶のルールが整えられて、規則正しく客同士で回し飲みが行われていたということだ。いわば吸茶は発生から五十年あまりで、急速に定着し、完成したと言えよう。

三 吸茶の初見と豊臣秀長

吸茶のあらましを理解できたところで、天正十四年の『松屋会記』に戻り、吸茶の初見と指摘されている条文をめぐる状況を確認しておこう。そもそも『松屋会記』自体、江戸時代になつて奈良の漆師の三代目松屋久重が、祖父久政、父久好の茶会記を編纂したものと考えられているため、厳密に言えば、同時代史料として扱うには些か問題がある。その点を留意しつつ、利休の没年である天正十九年を下限として、『松屋会記』から吸茶が行われた茶会を拾ってみると十八会確認できる。それらを年代順に列挙したものを表 1 として掲出しよう。

表 1 を一見してわかることは、吸茶の初見は十月十三日の中坊源吾の会ではなく、その二週間ほど前に郡山で開かれた豊臣

秀長の茶会であることだ。しかも、そこで点前をしたのは、秀吉の茶頭山上宗二であった。つまり、現存する記録の上で、吸茶の始まりは秀吉政権の中核にいる人たちによる茶会ということになる。そこで改めて、表1の亭主欄に着目すると、秀長が六回、そして中坊源吾をはじめとする秀長の家臣が八回見える。さらに客人として秀長の家臣が参席した二会を含めると、実に十八会のうち十五会がなんらかのかたちで秀長とその周辺の人々が関与していることになる。次に、表1の客人欄に注目すると、秀長の三十六名を筆頭に、十二名、十一名、八名と比較的大人数を迎えての茶会であることが目につく。そのような大人数の場合、三〇五名を一グループとして一服を飲み回している。関白秀吉の弟にして、紀伊、河内、大和の三国合わせて一〇〇万石を有する郡山城主秀長の茶会が大寄せになるのは、兄秀吉の茶会がイベント的な大茶会であることも無縁ではなからう。この点については後に検討したい。

そして最後に、表1の記載欄を見ると、一言で吸茶と言っても、その実施方法には三つのパターンがあった。

パターン1 亭主（茶頭含む）と客で一服を回し飲む（表1の番号1と2）

パターン2 客同士二〇五名で一服を回し飲む（表1の番号

1、2、10を除く15例）

パターン3 正客は一服飲み、次客以下は複数で一服を回し飲む（表1の番号10）

要するに、秀長の周辺ではその会の趣旨や客層に応じて臨機応変に吸茶スタイルを取り入れていたと理解できよう。ただその方法について、パターン1、パターン2とパターン3とでは、亭主が客人と同服するかしないかという相違がある。

そこで、亭主が客人と同服しているパターン1の茶会をひもといてみよう。天正十四年九月二十八日未明に、秀長は郡山城内にある曲音（秀長の茶頭）の屋敷に兄の茶頭であった山上宗二を迎えた。秀吉から譴責を受けた宗二は、大坂城を離れて秀長のもとを訪れたのだ。そして、その日の昼頃、久政一人が招待され、宗二の点前でもてなしを受けた。宗二はまず久政に薄茶を点てて供し、その後で濃茶を練った。その様子を久政は、次のように記している。

茶ハ極ム、如何ニモく／＼タフ／＼トスクキ、四ツ五ツ入、

湯一柄杓、スイ茶也、初口久政、次也、宗二取テ参ル、

これによると、宗二は極無をいかにもたつぷりと、それは茶杓に四、五杯ほどすくい、湯を一柄杓。これを「スイ茶」すなわち回し飲みした。初めは久政が口をつけ、次は点前をした宗

表 1 『松屋会記』に見える「スイ茶」記事

番号	年月日	場所	亭主	茶頭	客人	記載	出典
1	天正14年9/28	郡山	豊臣秀長	山上宗二	松屋久政	極無 茶杓4、5杯 湯は柄杓1 初口は久政 次は宗二？	久政茶会記
2	10/13		中坊源吾		宗治・宗立 ・久政	極無 亭主含め4名でスイ茶	久政茶会記
3	10/20	郡山城	豊臣秀長	曲音	8名	4名ずつ2組 スイ茶	久政茶会記
4	10/26		ナベヤ宗立		宗治・久政	スイ茶	久政茶会記
5	10/29		紺ヤ宗有		道か・久政	スイ茶	久政茶会記
6	天正15年1/24	郡山	桑山重長		寂福院・久政	極無 スイ茶	久政茶会記
7	1/27	郡山	多賀新左衛門		久怡・久政	極無 スイ茶	久政茶会記
8	8/20	郡山城	豊臣秀長		住吉屋宗無 ・久政	秀長点前 極無 客人2名のスイ茶	久政茶会記
9	10/2	郡山城	豊臣秀長	秀長点前	36名	極無 5名1組 スイ茶	久政茶会記
10	天正16年9/7	郡山 中坊	豊臣秀長		毛利輝元 坂東屋常勘 久政	輝元は1服 次に常勘と久政へ	久政茶会記
11	10/16		清水宗仙		中坊源吾・ 久政	別儀 スイ茶	久政茶会記
12	11/14	郡山	曲音		中坊源吾・ 久政	極無 スイ茶	久政茶会記
13	11/18		中坊源吾	御給仕 中坊源吾	等旧・与太 郎・久好	スイ茶	久好茶会記
14	天正17年1/27	郡山	桑山重長		紹斗・久好	スイ茶	久好茶会記
15	9/24	郡山 中坊	豊臣秀長	秀長点前	11名	くじ引きで5組 スイ茶	久政茶会記 久好茶会記
16	9/26		中坊源吾		宗治・久好	初服は中坊点前 次は秀長点前	久好茶会記
17	天正18年2/14	郡山	多賀秀種		12名	3名ずつ4組 スイ茶の記載なし	久好茶会記
18	天正19年 12/13		大東等旧		宗具・道か・ 久好	スイ茶	久政茶会記

二であった。

抹茶の分量は当時の平均的な一人分と見てよからう（『烏鼠集』¹⁴）。これに通常の大きさの柄杓に一杓の湯とすれば、かなり濃厚で、飲むというよりは吸うという表現がしっくりくると思われる。つまり「大名茶の湯」の一人分を二人で分け合つたということで、とくに二人目はどろつとした濃茶を吸いきるのに多少苦労したかもしれない。その二人目を秀長と考える向きもある¹⁵。だが、いずれにしろ重要なことは、客人の久政と吸茶したのが亭主サイドの人間だったという点だ。現代でもごく稀に「亭主相伴」と言つて、客が亭主に薄茶を勧めることがある¹⁶が、当時の茶会では現代ほど珍しい行為ではなかったようだ。というのも、戦国時代に行われていた茶の湯のありようを示す『烏鼠集』には、亭主がいつ薄茶を飲むべきであるかを詳細に説明しているからだ。つまり、別点でとは言え、主客で同じ茶（そこで使用された茶人に収まっていた茶という意味）を喫する行為そのものが武野紹鷗が説く「一座建立」を具現するということなのであろう。それが、主客によつて一碗の茶を回し飲むというより濃密な吸茶スタイルに発展したのではないかと思われる。そのことを端的に示しているのが、『烏鼠集』に見える次の記述だ。

一、佗数寄に、客と主との分、只二服程茶を引入れ調る事、本義をは少用して、佗て幽なる躰、一たんおもしろきなり、

つまり、各服点てを基調とする当時の茶の湯に対して、ただ二服くらいの茶を入れた一碗を客と亭主で分け合つて飲むことはイレギュラーだが、「わび茶」のいわば変形としては趣がある、というのである。この記述には「吸茶」の文言は記されていないものの、回し飲みという概念を示した史料としては最も古いのではないだろうか。

以上、いくつかの史料をたどることにより、吸茶のありようが見えてきた。先に紹介した小林氏の見解が受け入れ難いことは言うまでもなからう。日本には古くから共同飲食の風習が根づいていたし、中世の一揆で行われる一味同心の作法、すなわち焼いた起請文の灰を水に浮かべて回し飲みをする誓約の儀式もある¹⁸。キリスト教のミサを持ち出すまでもなく、中世社会で行われていた共同体の結束を固める回し飲みの行為が、主客による一座建立を尊ぶ茶会の場に持ち込まれたとしてもなんら不思議はない。

次に検討すべきは、本拠地の大和へ吸茶の風習を持ち込んだ秀長の背後にいる兄秀吉の茶会だ。

第三章 豊臣秀吉による吸茶の導入

一 茶会の効率化

秀吉の茶会でしばしば吸茶が行われたことは周知の通りで、とりわけ天正十五年正月三日に、九州出陣に際して行われた戦勝祈念の大茶会是有名だ(『宗湛日記』)。この日、秀吉との初対面を果たした博多の豪商神屋宗湛は、多数の大名が詰めかける中、特別待遇を受けたことを喜々として記録しているが、そこに吸茶に関する秀吉自身の発言が見える。状況を説明すると、秀吉は招待客が大人数なので名葉茶壺「四拾石」に収まってしまう茶葉だけでは足りないだろうから、「撫子」と「松花」の茶葉も挽かせるよう指示した。その時「多人数ナルホトニ、一服ヲ三人ツ、ニテノメヤ、サラバクジ取テ次第ヲ定ヨ」と発言したのである。つまり、本来なら各服点てにすべきだが、対応できないほどの大人数のため、三名で一服を飲むよう命じたわけだ。ところが、博多より参上した宗湛に対しては、「ソノツクシノ坊主ニハ四十石ノ茶ヲ一服トツクリトノマセヨヤト被仰出候ホトニ、宗易^(千)手前ニ参、一服被下候也、」と氣遣いを見せた。つまり、秀吉は宗湛へ並み居る大名を尻目に利休が練った「四

拾石」の茶一服たつぷりと飲ませること、ほかの客人との差別化を図ったわけだ。このスタイルは、前章で分類したパターン 3 にあたる。

これほど大規模な会ともなると、明確に正客を特定することは難しいが、宗湛が特別待遇を受けたことは明らかであろう。この日の茶会の場に限っては、宗湛が正客の扱いを受けるにふさわしい立場だったということだ。九州制圧を見据えた秀吉にとって、博多の有力商人である宗湛を確実に引き寄せておく必要があったからにはほかならない。さらに言えば、秀吉は、各服点てで「丁寧、吸茶」簡略と認識しており、大寄せの時には簡略なスタイルであっても吸茶が効率的だと理解していたことになる。なおかつ、吸茶と各服点てを組み合わせることで、客人の差別化を図ることも可能だ。こうした茶会の実施にあたり、側近茶頭である利休の助言があったかどうかは不明なもの、天正十五年の段階で、秀吉が吸茶を合理的な手段として、大いに活用している様子は確かめられよう。

二 画期となった禁中茶会

では、秀吉が吸茶を導入することで、効率よく大人数の客人をさばくことができると考えるようになったのはいつか。結論

を先に述べると、宗湛を大坂城に迎えた日の一年三ヶ月ほど前のこと、秀吉が正親町天皇ほか数名に茶を献じたいわゆる禁中茶会であったと思われる。『兼見卿記』天正十三年十月七日条によれば、十時頃に参内した秀吉は一献の儀などを済ませ、小御所へ赴いた。三御所（正親町天皇、誠仁親王、周仁親王）が出御し、七名の公家衆が祇候する中、秀吉点前による御茶の儀が執り行われた。三御所が還御すると場所を移して再び茶会が行われた。注目すべきは、次のくだりだ。

次於^(三)端之御座敷ニ於テ、御茶之儀在之、^(千利休)理休居士茶道、
台子之御茶也、一番一条殿^(内基)へ参也、次清華之衆、次各数人、
無尽期、関白^(豊臣秀吉)仰云、一服タテ不相果、既及夕、

これは祇候していた公家衆に茶を振る舞う、いわば跡見の場面を記録したものだ。端の座敷に移動して行われた跡見は利休の点前による台子の茶の湯であり、客人らは茶をいただく順番を公平に決めるためクジを引いた。一番目を引き当てた一条内基が最初の一服をいただき、以下、クジの順番に従って次々といただいてみると、秀吉が「こうして各人へ一服ずつ供している、いつまでも時間がかかってしまう。もう夕方になっていくではないか」と言った。これこそが、吸茶導入のきっかけとなった発言である。時と場所、会の趣旨に鑑みれば、台子が用

いられ、正式な各服点てで各人に茶が供されたのは、至極当然である。だが、客人が七名もいれば、長丁場にならないはずもない。秀吉にしてみれば、ここは伝統に則って各服点てをしているが、時間がかかりすぎている、というのが正直なところだったに違いない。そこで、茶会の効率化というものを考え始めたのではなからうか。まさにその現場に、この日のために居士号を勅許された利休が茶頭として点前していたわけだが、ここでも吸茶を進言したのかどうかは不明だ。史料から読みとれることは、秀吉が伝統的な各服点てへの不満をもちしに過ぎない。だが、このつぶやきが吸茶導入の第一歩となったのである。

では、秀吉が茶会で吸茶を実践したのはいつか。それもまた、禁中茶会であった。前回の茶会から三ヶ月後の天正十四年正月十六日、秀吉は完成したばかりの黄金の茶室を小御所に持ち込み天覧に供した。その様子は『兼見卿記』に、次のように記されている。

次関白^(豊臣秀吉)御参内、直小御所ニ御座也、次主上^(正親町天皇)出御、小御所金之御座敷ニ御座云々、親王御方、若宮御方同前、次在御膳之儀、次御茶、殿下御茶ヲ立ラル、主上、親王、若宮、^(近衛俊成)龍山、^(山内一豊)菊亭、関白、若宮へハ湯ヲ参ル、以上五服、関白之吞サシ、^(晴徳)勧修寺ニ被遣之云々、

これによれば、小御所に設営された黄金の茶室に正親町天皇が御座し、誠仁、周仁両親王がこれに続いた。膳の後に濃茶となり秀吉が点前した。この日は三御所に加え、近衛前久、今出川晴季に亭主秀吉を加えた六名での会であったが、白湯を差し上げた周仁親王の分を除き、秀吉は五服点前をしたというから正統な各服点であった。亭主である秀吉も自服で飲んだことになるが、この行為が特異でなかったことは前章で述べた通りだ。

さて、ここで、秀吉が自らの飲み止しを勧修寺晴豊に与えたという部分に着目したい。^⑩兼見の言う「吞サシ」とは、「わび茶」の趣向のひとつである主客同服のことである。そして一服を回し飲むという意味で言えば、これこそが吸茶の初見と見なすことができる。とすれば、吸茶は天正十四年正月十六日に秀吉によって行われたことになる。吸茶を導入することにより、社会的立場を体现することができ、なおかつ時短も期待できる。前年の禁中茶会でのつばやきが伏線となり、極めて合理的な方法として吸茶が取り入れられたのではなからうか。

三 大友宗麟を迎えた茶会

禁中茶会から三ヶ月後、秀吉は豊後より上坂した大友宗麟を

大坂城に迎えた。宗麟は薩摩の島津氏が秀吉の停戦命令を無視していることを訴え、救援を求めて東上したのであった。宗麟との対面儀礼を済ませた秀吉は、饗膳を供した後、自慢の黄金の茶室を見せ、四月五日、利休点前による茶会を開いた。その様子は宗麟が重臣へ宛てた書簡に詳しい(『大友家史料』三五五号)。それによれば、秀吉より「宗麟は茶が好きか」と尋ねられた利休が「なかなか好きでございます」と返答。それならば宗麟へ一服を、という運びになったという。注目すべきは、次のくだりだ。

さて、宗^(大友宗麟)滴へ被下候、半分程残候を紹岸、折々上下辛勞仕候、下ヲハ是非共、紹岸へ被下候へとて、紹岸拝領、面目之至候、連々辛苦之首尾にて候、

宗麟は一服の濃茶を供されるも、半分ほど飲み、残りを日頃より苦勞している家臣の紹岸へ下賜した。それにより、紹岸は面目をほどこし種々の苦勞が報われたというのである。ここに、主従関係の確認、強化といった共同飲食の基本原理が働いていることが見てとれる。一服の茶を主従で分け合うことは、いわゆる下物の変形と捉えることができる。^⑪いわば秀吉の茶会では、人と人とのつながりを実感できる行為として吸茶が認められつつあったということになろう。

それから五ヶ月後の九月二十八日、大和郡山城で行われた秀長の茶会で、茶頭の山上宗二が吸茶を行ったことはすでに述べた。秀長が郡山城で行った方法は、十月二十日の茶会を例にとると、まず八名の客人を四名ずつ二グループに分け、それぞれのグループに一人ずつ茶頭を配す。茶頭は二名分を一碗とした濃茶を二回点前する、という手順であった。つまり秀吉の周辺では、二人一組で一服を回し飲むことやその実践方法も定まりつつあったということで、吸茶は確実に広がりを見せていたのである。従って、先行研究で指摘されている『松屋会記』の「スイ茶」記事は、その初見ではなく、すでに秀吉が実施していた効率のよい飲み方としての吸茶が、秀長によって大和へもたらされたことを示す記述と位置づけることができる。

翌天正十五年になると、先述のように「吸茶せよ」との秀吉の発言があり（『宗湛日記』）、さらに十月二十一日昼に開かれた大坂城山里での茶会でも吸茶があった。この日、津田宗及、神屋宗湛、小寺休夢は、三名で秀吉の練った一服の濃茶を飲み回したが、亭主の秀吉は一服を一人で飲んだ（『宗湛日記』）。各服点でと吸茶とを組み合わせることににより、その場に参席する人々の格差や立場を明示することもできる。天正十四年と十五年には頻繁に吸茶が行われていたとの指摘もあるが、その

背景には秀吉が公的に吸茶を導入した事実があり、そのことが吸茶を急速に広めるきっかけとなったと考えられよう。

かくして、吸茶の発生が天正十四年頃という先行研究の指摘は正しい。しかしながら、その出発点は秀吉にあり、利休の関与を論証することは極めて難しいと言わざるを得ない。残された史料が示すことは、秀吉その人が禁中茶会の長丁場をきっかけに、「わび茶」の趣向であった主客同服を取り入れたということである。その方法と効果は、次の三点にまとめることができる。

- 一、客同士が一服を回し飲むことによって得られる時短
- 二、亭主（茶頭含む）と客が一服を分け合うことによって得られる一座建立の趣向
- 三、各服点でと吸茶の両方を組み合わせることによって得られる社会的立場の体现

このように合理的な吸茶は、大寄せにも対応できるスタイルとして秀吉の周辺で公的に行われ、徐々に浸透していったのはなからうか。

第四章 服属儀礼としての茶会

一 豊臣秀吉と島津家とのいきさつ

関白が執り行う公的な茶会として、時に記録できないほどの客人を招くのを好んだ秀吉にとって、時短は切実な問題であったはずである。吸茶はそれを解決するのみならず、客人それぞれのつながりや社会的立場を体现することもできると秀吉は気がついていたに違いない。そこで本章では、服属儀礼の一環として行われた秀吉の茶会を改めて検討し、吸茶が定着した政治的かつ社会的意義を考えたい。

大坂城で行われた服属儀礼のありようは、吉川、小早川、大友、上杉、島津、毛利といった大名たちがそれぞれ残した記録によって具体化することができる。すなわち秀吉は大坂城全体を饗応の舞台と見なして、広間での対面儀礼、七五三の饗膳、天守や黄金の茶室などの見物ツアー、猿楽や囃子、乱舞といった余興に、茶会という豪華なプログラムを組んでいた。茶会では、大友宗麟の書簡で見たとように、大人数でなくとも、つまり各服点で対応できる程度であっても吸茶が行われていた。宗麟を迎えた茶会で吸茶が行われたのは時短というより、主従関

係を確認する意味合いが強く、いわば下物の変形と捉えるべきであろう。本章では、その点を薩摩の島津義久、義弘兄弟の事例から検討する。分析の素材とする史料は、次の二点だ。

a、『旧記雜録』天正十五年六月二十六日

博多宮崎での秀吉茶会

b、『島津家文書』一四九三号 客人…島津義久、伊集院忠棟
天正十六年六月四日

大坂城での秀吉茶会

茶会の背景を理解するため、簡単に秀吉と島津家との関係振り返っておこう。全国平定のために九州地方の制圧が必須と考えた亡君織田信長の構想を引き継いだ秀吉は、天正十三年十月二日、島津義久へ書状を送った（『島津家文書』三四四号）。そこで秀吉は、関東残らず奥州の果てまでも天下静謐となつたのに、九州だけが抗争を続けているのはいかなるものかと非難し、即刻大友氏と和睦するようにとの勅命を伝え、それに応じなければ必ず成敗すると記した。関白として勅命を振りかざした堂々たる和平勧告であった。その交渉に際し、秀吉は外交官をたてて義久の宿老伊集院忠棟へ副状を送らせた。細川幽斎と千利休である。²³

一方、島津家内ではいかに返答すべきか談合に及んだ。結局、「由来無き仁」つまりいかかわしい出自の秀吉が関白などとは笑止千万で、それに対し我が家は源頼朝以来の名門。従つて、ここは庶流とは言え、名家の細川幽斎と「茶湯者」として名を馳せている千利休へ返書を、ということになった（『上井覚兼日記』天正十四年正月二十三日条）。

こうして返書を携えた島津家家臣の鎌田政弘は大坂城へ向かい、幽斎の導きで登城した。式三献と進上品の贈答を行った後、湯漬けを供せられた。その場には安国寺恵瓊、堀秀政、佐々成政、小早川隆景、幽斎が同席。滞在中に秀吉と四度対面した鎌田政弘は、そのたびに過分な贈り物を頂戴した。ある時には太刀一腰、またある時にはその場で脱いだ打掛、さらには旅費として万疋といった次第だ。あわせて秀吉は、肥後半国と豊前半国と筑後を大友宗麟に、肥前を毛利輝元に、筑前を秀吉の直轄領とし、残りを島津義久の領地とする九州統治のプランを語り聞かせ、七月までに返答せよ、さもなくば出馬すると申し渡した。それから秀吉自身が天守を案内し、そこで茶の湯の振る舞いもあったという（『上井覚兼日記』天正十四年五月二十二日条）。

むろん、島津家ではそのような条件など当然受け入れることなどできず、結果、世に言う九州征伐が行われた。しかし、天

正十五年五月八日、ついに島津義久は降服し、秀吉政權に組み込まれることになった。こうした経緯で、義久が初めて秀吉の茶会に参席することになったのがaである。

二 島津義久および島津義弘を迎えた茶会

九州を平定した秀吉は、六月三日から博多の筥崎八幡宮の社頭に三疊敷の数寄屋を構え、茶会に興じていた。とりわけ義久を迎える前日の茶会は、秀吉の様子を知る上で参考となろう。六月二十五日、秀吉は幽斎を伴つて宗湛が陣屋に構えていた二疊半へ赴いた。すると、秀吉は次のような挙に出た。

床ニハニシキノシトネ敷テ、関白様被成御座候テ、御膳アリ候、御茶ノ時ハ、下ニヲリサセラレテ、キコシメサル、ナリ、

すなわち、床の間に錦のしとねを敷いて座り、そこで食事をし、茶が点てられると床の間から降りて飲んだというのだ。さらに宗湛は、秀吉が津田宗及や九鬼嘉隆らと次の間に控えていた小寺休夢に配膳させたことも記している（『宗湛日記』）。狭い空間で、唯一の上段である床の間を自らの御座所と見立てたのであろうか。あるいは九州平定を成し遂げた秀吉の高揚した気分が、このような奇想天外な客振りに表れたのであろうか。

いずれにせよ、義久を迎える前日、秀吉は上機嫌だったのである。

そして二十六日未明、秀吉は三疊敷に義久と伊集院忠棟を招いた。床の間には馬麟「朝山の絵」を掛け、その下には盆にのつた「初花肩衝」を置いた。食後に「初花肩衝」を水指の前に置き直し、秀吉自身が点前をした。茶は「極無」で、正客の義久へは茶杓三すくい、次客の伊集院忠棟へは五すくいというから、明らかに伝統的な各服点てであった。しかし、秀吉の仕草はそれとは裏腹に「おりひさ」つまり正座であったというのだ。当時の正式なマナーに照らせば、当然ながら片膝立てであるべきだ。⁽²⁴⁾だが、秀吉は当時「危坐」と呼ばれた罪人の座り方で点前をしているのである。得意絶頂にあるはずの秀吉が妙にへりくだっているようにも読めるが、ひとまず茶会での斬新さの表現と考えておきたい。⁽²⁵⁾床の間に座った前日の振る舞いと言い、正座での点前と言い、秀吉の意図を推し量ることはできないが、前代未聞のパフォーマンスであったことはまちがいないだろう。

天正十六年六月、いよいよ秀吉は島津義弘を大坂城へ迎える。前年に服属を決めたばかりの義弘は、五月二十六日に鹿児島を発ち、およそ一ヶ月後に堺へ到着。六月四日、大坂城で秀吉に謁見し、六日に山里三疊敷での茶会に招待された。その様子は

義弘自身が国元で待つ子息忠恒（島津家久）へしたためた書簡に詳しい（『島津家文書 三』一四九三号）。

それによれば、茶会当日、義弘は伊集院忠棟を伴って津田宗及の案内により席入。座敷には台子飾りがなされており、まもなく饗膳が供された。秀吉も同席したのだが、そのような行為は極めて珍しいとの説明を受けている。食事が終わり濃茶となった。義弘は道具組も記しており、とりわけ注目すべきは「大友宗麟より召し上げた」との由来とともに拝見に供された「にたり茄子」だ。このような室札や行為は、信長による茶会の政治的利用の模倣であろう。すなわち、「にたり茄子」には大友も島津も一様に秀吉の配下なのだという政治的メッセージがこめられている。⁽²⁶⁾濃茶が終わると、場所を山里内の二疊敷に移して薄茶が供せられた。義弘の書簡によつて茶会の全体構造が明らかとなり、その形式が整ってきたことが看取できようが、とりわけ本稿との関わりで注目すべきは濃茶の場面だ。義弘の書簡を引用しよう。

御茶のとき幽斎（備川）被召出、手前者（十）せむの宗易、武庫（島津家久）ハ一服可被下之由、幽斎（伊集院忠棟）、幸侃、宗易ハすい茶たるへきよし御錠候、濃茶が始まる時、細川幽斎が呼ばれて席入。点前は千宗易（利休）であった。ここで秀吉が「義弘には一服差し上げよう。そ

して幽斎と伊集院忠棟と利休三人で一服を吸茶するように」と発言した。

前年、筥崎で義久を迎えたおりは伝統に則った各服点でであったが、今回は各服点で＋吸茶であった。前者が出陣先での挨拶であり、後者が本拠地での正式な茶会という違いもあるが、ここに吸茶の意義を解く鍵がある。つまり、臣下の礼として執り行われるハレの茶会には、それにふさわしいスタイルがあるということだ。そのように考えれば、濃茶が始まる時になって、幽斎が呼ばれている理由も明白であろう。この日に至るまでの政治的経緯に鑑みれば、秀吉の外交官として島津家との交渉を担当した幽斎と利休、そして島津側の伊集院忠棟で一服を回し飲むという行為は、島津征服までの道のりや連携を象徴しているのではないか。そしてこの三名とは別に義弘には一服を、という指示には、当然ながら義弘と伊集院忠棟との主従関係を端的にあらわしている。いわばこのスタイルには、政治的なストーリーや人間関係が幾重にも織り込まれているのだ。もちろん、三名を吸茶にすることで時短も期待できる。このような極めて政治的かつ合理的、そして斬新なスタイルを差配しているのが天下人秀吉という構図が見える。こうして秀吉によって編み出された主従による飲み方の相違は、やがて単純に正客と次客以

下の格差に置き換えられ、長い年月を経て現代の茶道のかたちに集約されていったのであろう。

三 千利休の問題

以上のように、当該期の史料を素直に読めば、吸茶は秀吉の意志によって大坂城で執り行われた大寄せや服属儀礼に導入され、形成されていったことが明らかである。とすれば、ひとつ残された問題がある。江戸時代の茶書に記され、今なお定説となっている利休の関与だ。これまでの検討から言えることは、吸茶が行われた秀吉の茶会で利休は茶頭として登場することもあったが、管見の限り、利休が吸茶そのものを始めたことは確認できなかった。とは言え、利休が『烏鼠集』に記される主客同服を知らぬはずもなく、何より自身でも吸茶を取り入れていた。それは天正十六年九月四日朝に開かれた古溪宗陳理想の茶会だ。^⑦この時、亭主利休は、正客の春屋宗園（古溪の法兄）へ茶約三すくいで一服、次客の玉甫紹琮（古溪の弟子）と三客の本覚坊暹好（利休の弟子）へは吸茶なので茶約五すくい入れて練っている。秀吉が島津義弘をもてなした時と同じスタイルで、古溪宗陳との関係を考えて正客と次客以下との差別化を図ったものと思われる。だが、やはりこの史料も吸茶が利休より始まっ

たという証拠にはならず、むしろたんに時期的なことを言えば、秀吉より後に行われてさえる。

実は、利休のアイデアにまつわる逸話に関しては、これと同質の事例が二点ある。ひとつが一尺四寸の小さな炉の出現で、いまひとつが小間（三畳敷や二畳半）での唐物名物の取り合わせだ。これらはいずれも利休の「わび茶」が完成したことを示す作意と見なされているが、同時代史料では、前者は利休より一年早く弟子の山上宗二が実践しており、後者はさらに早く明智光秀の茶会で見える。⁽²⁹⁾しかしながら、茶の湯の世界では利休の手柄として認識されているのである。⁽³⁰⁾本稿のテーマである吸茶もこれらと同様に、現存する史料から、利休が出発点であることを論証することは難しい。ではなぜ、史実と伝説との間に相違が生まれたのだろうか。それを解き明かすためには、歴史上の人物としての利休、そしていくつもの伝説をまとった茶聖利休という二つの方向からの研究が必要になるだろう。今後の検討課題としたい。

むすびにかえて

本稿では、江戸時代の茶書にもとづき、千利休によって始め

られたと漠然と認識されている吸茶について、豊臣秀吉周辺の同時代史料をもとに、その導入から定着、そして意義を探ってきた。茶会で吸茶が取り入れられる契機となったのは、天正十三年十月七日、秀吉によって行われた禁中茶会の跡見であった。そこで秀吉は、七名の公家衆を相手に伝統に則した各服点で濃茶を供したのだが、それは時間との闘いでもあった。大寄せの茶会を好み、閑白としてイベント化した大茶会をしばしば開催した秀吉にとって、効率よく茶会を遂行することは大きな課題であったに違いない。その手段として導入したのが吸茶であった。一言で吸茶と言っても、当該期の史料から三つのパターンがあったことが見てとれる。

一、客同士が一服を回し飲む

二、亭主（茶頭を含む）と客とが一服を分け合う

三、各服点でと吸茶との組み合わせ

これら三つの方法は時短効果はもちろんのこと、参席する人々の社会的立ち位置や関係性をも明示することにもなり、極めて合理的な手段として急速に普及した。

各服点から吸茶へという茶の飲み方の変容は、「大名茶の湯」から「わび茶」へと茶会の趣向が変わったことに伴う一大改革のひとつであったと言える。すなわち、広い座敷から小

間へ、少人数制から大人数をグループ分けして順次席入りへ、唐物絶対主義から唐物、和物、高麗物のミックスへ、など茶会のありようも変わっていった。その主たる要因は、室町以来の唐物名物が失われた本能寺の変を挟んだ政権移行にある。従って、茶の飲み方を含む新しい茶の湯誕生の背景には、後世の逸話で流布されているような利休の好みや思考という個人的な問題ではなく、天下人が政治的儀礼の中で執り行う茶会にこめたストーリーがあるのだ。そのストーリーの一コマに利休の好み が採択されたことはまちがいないが、それは決して主役ではない。つまり、主従関係を象徴する共同飲食の持つ歴史的意義に即して茶会という響応を捉えるべきであろう。その中に吸茶の問題も含まれるのだ。秀吉よって導入された当初は、そのような意味を持った吸茶ではあったが、それが家元の茶道に取り込まれた時には、利休の発案かつ一座建立の象徴という茶道に即したストーリーが必要とされたのではなかったか。その結果、江戸時代の茶書に書き残された吸茶の由来や解説が、茶道に関わる人々の間で珍重されたのであろう。それはそれでひとつの茶道の歴史でもある。しかし、史実とは分けて考えるべき歴史である。

二〇二〇年、新型コロナウイルスの蔓延により、回し飲みを避けるべ

く、各服点でが復活したが、それはいわば信長時代に主流であった伝統スタイルの復興でもある。非常事態における一時的な点前手続きであったとしても、文献の中だけで生きている「大名茶の湯」の所作を想像するよすがになるだろうと思う。

注

- (1) 米原正義『天下一名人 千利休』（淡交社、一九九三年）。
- (2) 筒井紘一『山上宗二記を読む』（淡交社、一九八七年）や「吸茶」（『角川茶道大事典』角川書店、一九九〇年）など氏の著作物にしばしば見られる。
- (3) 「スイ茶」が回し飲みを意味することは『日本国語大辞典』や『日葡辞書』などに記されている。
- (4) 熊倉功夫『昔の茶の湯今の茶の湯』（淡交社、一九八五年）。
- (5) 小林絃子「見聞記」に見る茶の点て方と飲み方」（『茶道文化研究』第七輯、二〇一五年）。
- (6) 熊倉功夫「茶書研究の過去・現在・未来」（『茶の湯文化学』三十四号、二〇二〇年）。
- (7) 熊倉功夫「茶の湯の伝承―雑話・逸話・咄」（『茶の湯研究―和比』八号、二〇一四年）。
- (8) 竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』（思文閣出版、二〇〇六年）。「大名茶の湯」にかわり、「わび茶」が流行した背景には、本能寺の変に伴う信長の唐物名物コレクションの崩壊、散逸、消滅にある。そのため、秀吉は亡君を超越するようなコレクションを形成すべく、和物クリ

エーターの利休を重用した。

- (9) 『烏鼠集』の翻刻と最近の研究は、『茶書古典集成— 初期の和漢茶書』(淡交社、二〇一九年)に詳しい。
- (10) 二本謙一『中世武家の作法』(吉川弘文館、一九九九年)。
天正三年十月三十日付曲直瀬道三書状。詳しくは注 8、第二部第一章。
(12) 注 5 に同じ。
- (13) 注 8 に同じ。
- (14) 『烏鼠集』によれば、「無上」は五杓、さらに上質な「別儀」は七杓だが、これより少ない場合もあると記されている。
- (15) 『松屋会記』を校訂した永島福太郎氏は「次也」の「也」は誤記で、二口目は秀長が飲んだと注記されている。
- (16) 『烏鼠集』には、すべての客人が茶を喫した後、亭主が再び点前をし、それを自身でかしまって飲む時のマナーが書かれている。また、岡本浩一「亭主相伴の稽古」(『淡交』二〇二一年七月号)によれば、現代の茶道でも、とりわけ親しい間柄で開かれる茶事で「亭主相伴」が行われるが、その確率は半分くらいで、その場に参席する全員が空気を読み、絶妙のタイミングが生まれた時に起こる「小さな奇跡」という。
- (17) 注 5 に同じ。
- (18) 千々和到「誓約の場の再発見」(『日本歴史』四二二号、一九八三年)。
矢部健太郎「豊臣政権の支配秩序と朝廷」(吉川弘文館、二〇一一年)では、武家伝奏である晴豊との特殊な関係をも、秀吉があえて天皇の前で表現したと指摘されている。
- (20) 下物に関する議論については、保立道久「庄園制的身分配置と社会史研究の課題」(『歴史評論』三八〇号、一九八一年)、笈雅博「饗応と賄」(『日本の社会史 第四巻』、岩波書店、一九八六年)、原田信男「古代・中世における共食と身分」(『国立歴史民俗博物館研究紀要』七一集、一九九七年)などに詳しい。
- (21) 注 5 に同じ。
- (22) 注 8 に同じ。
- (23) 細川幽斎と千利休による副状は、桑田忠親『定本千利休の書簡』所収の八四号文書(東京堂出版、一九七一年)。
- (24) 当時の仕草が片膝立てであったことは『烏鼠集』に明確に書かれており、また中村修也「片膝立てである茶の湯 上下」(『茶の湯文化学』二十八・二十九号、二〇一八年)でも論証されている。
- (25) 後世の史料によれば、利休は点前の時、敷物を畳に厚く敷き、「両足ヲ折シキ」すなわち正座をしたと伝える(『茶湯古事談』)。しかし、真偽のほどは不明である。
- (26) 詳しくは注 8。
- (27) 注 1 に同じ。
- (28) 津田宗及の『他会記』永禄十一年十月二十七日条。
- (29) 津田宗及の『他会記』天正七年正月七日条。
- (30) 本文にあげた二例のほか、利休好みを象徴する長次郎の赤樂茶碗や菓子・麩の焼の使用についても、記録の上では利休より山上宗二の方がずっと早いことから、利休が宗二に做った可能性が指摘されている(神津朝夫『山上宗二記入門 茶の湯秘伝書と茶人宗二』、角川学芸出版、二〇〇七年)。
- (31) 田中仙堂『千利休「天下二」の茶人』(宮帯出版社、二〇一九年)では、歴史上の人物として利休を研究することを強く意識されている。また、利休の二面性については、竹本千鶴『古典で旅する茶の湯八〇〇年史』(淡交社、二〇二〇年)でも少し述べている。